

建築家ブルーノ・タウト

没後80年の展示会と婦人之友

日本文化のすばらしさを世界に紹介した、ドイツの建築家ブルーノ・タウト。
2018年12月、没後80年の展示会が開かれたドイツを訪ねた。

写真・文／田中辰明（お茶の水女子大学名誉教授）



世界遺産ファルケンベルクの住宅



ブルーノ・タウト（1880～1938）
表現主義の建築家、都市計画家。
1933年より3年半、日本に滞在。

今回の展示会場となったのは、ベルリンの南約40 kmにあるブランケンフェルデという町だ。ブルーノ・タウトは1938年12月24日にイスタンプールで客死した。その日を記念した展示会は大規模なもので、さまざまな資料や写真などが集められていた。建築を専門とする筆者は、この展示会をお手伝いした関係で招待を受け、12月14日に訪問した。

ナチスの手を逃れて日本へ

タウトの作品である4つの住宅団地（ジードルングと呼ぶ）は、2008年にユネスコの世界文化遺産に登録されている。いずれもベルリン市にあり、田園都市ファルケンベルク（1913～16）、シラー公園の住宅（1924～30）、ブリッツの大規模住宅団地（馬蹄形住宅団地・1925～30）、カール・レギーンの都市住宅（1928～30）である。

タウトの仕事はもともと勤労者に健康的な住宅を供給しようという社会主義的性格だったうえに、モスクワで仕事をしたことにより1933年に台頭してきたナチス政権に睨まれて、あこがれていた日本へ亡命のような形でやってきた。

ベルリン工科大学（当時はシャルロテンブルグ工大）の教授もしていたので、当然、東京帝国大学教授に迎えられると期待していた。しかし当時の日本の政権はナチスと一緒にやっていこうと考えていたので、そのような仕事に就くことはできず、かつ建築設計の仕事も思うようにはで



タウトの孫クリスチーネ・シリールさんと筆者、会場で

きなかった。

やむを得ず、高崎の少林山だるま寺の庵「洗心亭」にこもり、「建築家の休日」と自嘲し、専ら著作に励んだ。桂離宮や伊勢神宮を世界に紹介した『日本美の再発見』と『日本タウトの日記』（いずれも篠田英雄訳・岩波書店）は有名である。

『婦人之友』に見る足跡

雑誌にも寄稿を行い、『婦人之友』では筆者が知るだけでも、1933年11月号に「新建築小探検行、ブルノ・タウト氏と東京を歩く」、35年10月号には座談会「日本人の洋服をどうするか」、34年10月号では「近代の住宅」、33年11月号では「ドイツ風の家料理」を発表している。朝日グラフにも寄稿しているが、数では『婦人之友』が圧倒している。



ダーレピッツにあるタウト旧宅。左ページ上の本誌・1934年10月号と同じアンゲルで撮影(2018.12.14)

このうちドイツ料理の記事は、タウトと共に来日したエリカ・ヴィテツヒが書いている。ただし当時のことであるからか本名は出さず、「ブルノ・タウト夫人」という形で執筆している。エリカは自由学園でドイツ料理の授業も行った。

タウトの日記には、1935年9月3日に次のような記述がある。

「上京。自由学園(女学校)に招かれ、この創立者であり園長でもある羽仁もと子氏と、近頃の婦人の服装その他について対談した。今(和次郎)教授も同席されたが、同氏はいつもながら気持ちのよい人である。校舎は遠藤新氏(アメリカの建築家ライトの弟子)の設計でやや堅苦しく、かつこせこせしたところもあるが、最近のモダン建築に比すれば遙かにましである。それにこの学園は

都心からかなり離れた郊外にあるので、あたりがいかにも広々として気持ちがいい。

生徒は300名ばかりで、基督教的な学校だが、近代日本にとっては適切な施設である。羽仁園長は、頗る有能で、また多くの人から尊敬されている。……」

ご家族のその後

展示会には、お孫さんであるクリスチーネ・シリールさんも来場していた。この方はドイツで緑の党を立ち上げ、のちに社会党(SPD)に転じ、社会党政権時代の1998〜2005年にわたり内務大臣を務めた大政治家オットー・シリールと結婚した(しかしその後、離婚している)。ドイツにおける原発の廃止や環境政策に貢献した政治家である。



『婦人之友』の誌面より



1933 (昭和8) 年11月号

1935 (昭和10) 年10月号

実はタウトと共に来日したエリカは、日本ではタウト夫人で通していたが、極めて優秀な秘書であった。タウトが鋭い観察眼で日本文化を見聞きし、これを記述できたのも、速記がうまかったエリカの援助があったからである。

エリカはトルコで客死したタウトの遺品を、デスマスクを含めて引き取り、当時ドイツ人にとっては危険なシンガポールなどを通って来日。タウトが住んでいた高崎の少林山だるま寺に届けた。その結果、日記や書籍などの翻訳が日本で可能になった。

タウトの正妻は、ベルリン郊外のコリン出身のヘードビツクであった。夫に他の女性と日本に行かれたが離婚はせず、最後にタウトの死亡広告をドイツの新聞に出したのは、このヘードビツクであった。第一次世

界大戦後のこと、ドイツの適齢期の男性は多く戦死して男女の数のバランスが崩れ、このような事もあったようである。

お孫さんのクリスチーネさんとトットー夫妻の娘、ジェニーさんはドイツで有名な女優である。2010年には「犯罪地―ヒッチコックとヴェルニッケ」で主演を演じている。タウトのひ孫にあたるが、この方も展示会に連れられ、曾祖父の偉業に見入っていた。

新しい住宅の提案は

女性への視点から

筆者は展示会を見た後、隣のダレビッツにあるタウトの旧宅を訪問した。ここには画家で音楽家でもあるハンナ・ディプナーさんが一人で住んでおられる。この住宅こそが

『婦人之友』に紹介された「近代的住宅」である。1926～1927年にかけて作られた。

当時のドイツの主婦は家を管理するのにも、非常に多くの時間を費やしていた。タウトはこれではいけないと考え、住宅の管理で時間を節約できることを考え、その思想をこの住宅で実現した。この住宅に関しタウトは「一住宅『Ein Wohnhaus』という本を1927年に出版している。この本が出版される前の1924年にタウトは『新しい住居、創造者としての女性』Die neue Wohnung: Die Frau als Schöpferin」という本を出版、住宅に関する考え方を示した。今回、私はこの住宅の写真を撮影。庭側から見た住宅は、『婦人之友』に1934年に紹介されたものと同ジャンルである。85年経過しているが、

以前と変わりはない。建物は本体をしっかりと作っておけば途中改修をしつかり行うことにより、十分に長く使用できるものである。この住宅の修復は、有名建築の修復を得意とし、特にタウトの作品の保存に尽力したベルリンの建築家ヴィンフリード・ブレンネンにより行われた。

この住宅の内部は赤や青、黄色といった原色が使用されている。日本人にとってはかなり派手でどぎつい感じを受ける。しかし緯度の高い北ドイツの冬は日の出も遅く、日没は早い。昼間も重い雲が垂れ込め、陰鬱な気分になる。このような時にタウトが使用した原色は人々に生きていく力を与えるものである。住人であるディプナーさんも「この色の中で生活していると気分が落ち着くのです」と話しておられた。

健やかに年を
重ねる生きかた

明日の友

あすのとも

238号・早春



生活
特集

転ばせない 転ばせない 生活

648円+税

【健康特集】もう一人で悩まない「便失禁」を改善 診断と治療 神山剛一
【対談】お茶をめぐる旅 ステファン・ダントン 宝道典子「旅 出会い」帯広・新得
【料理】寒い日のお粥と麺／那須の「サ高住」快適生活 久田 恵／毎日のヨガ

●樋口恵子さんの室内ウォーキングコース
●上手な歩き方と介助 転ぶことを想定する
●楽しく鍛えて転ばない体に 簡単体操 ほか

注文係直通 ☎03-3971-0102

婦人之友社

定期購読なら確実に届きます



ツェーレンドルフのジードルング (2018.12.18)。本誌・1933年11月号に紹介

住む人に愛される住居

12月19日には、「婦人之友」1933年の「新建築小探検行、ブルノ・タウト氏と東京を歩く」に写真が紹介されている、ツェーレンドルフのジードルングを見学した。

これは1926～1931年に建設されたもので、タウトが日本に亡命する直前の作品である。ユネスコの世界遺産には登録されていないが、緑を沢山配置し、「森のジードルング」、オンケルトムズヒユッテ（アンクル

トムの小屋」と呼ばれている。

地下鉄の駅「オンケルトムズヒユッテ」を挟んで住宅街が広がっている。タウトは商店を住宅地の中に作らせず、地下鉄駅に沿って作らせた。駅中商店のはしりである。このジードルングの中にはブルノ・タウトの顕彰碑も建っている。このことから、タウトがいかに住民から感謝され、敬愛された建築家であったかがうかがわれた。

*参考文献「ブルノ・タウト、日本美を再発見した建築家」筆者著（中公新書）ほか